

みんなのみどり

通 刊 1 8 号

2012. 7. 30

発行 みどり・山梨

事務所:山梨県甲府市古府中町984-2

(川村方)

電 話 : 055-252-0288

FAX : 0553-33-7620

URL:<http://www.midoriyamanashi.com>

E-mail:kankyo@midoriyamanashi.com

【報告】緑の党結成！ キックオフ！イベント 希望の未来をつかもう！

窪田誠

7月28日、ついに日本に「緑の党 Greens Japan」ができました。2012年7月28日、東京・水道橋のYMCAアジア青少年センターで開かれた結成 総会では、結成宣言が発表され、規約、社会ビジョン、基本政策、役員、2013参院選選挙要綱などが決定されました。4名の共同代表（すぐろ奈緒、高坂勝、長谷川羽衣子、中山均）と34名の全国協議会委員などの役員は、規約と細則に基づき、地域、ジェンダー、活動領域、世代のバランスに配慮し、女性を半数以上とするクォータ制によって選出されています。

「緑の社会ビジョン」を示し、

- ① いのちと放射能は共存できない！ “地産・地消”の再生エネルギーで暮らす
- ② 自然の循環と多様性のなかに暮らしを置きなおす
- ③ 競争とサヨナラし、スロー・スモール・シンプルで豊かに生きる
- ④ 格差と貧困をなくし、分かち合いを実現する
- ⑤ 性による差別・抑圧のない平等な社会へ
- ⑥ 子どもと未来を育む
- ⑦ 多様で違ったあり方を認め合う
- ⑧ 熟議と当事者主権にもとづく参加民主主義を実現する
- ⑨ 平和と非暴力の北東アジアを創り、戦争や暴力、差別のない国際社会をめざすための基本政策が決められました。



このほど結成された日本の緑の党は、世界の90の国や地域で活動している「緑の党」が参加し、国益よりも地球益を求め、国際的な連携を重視する国際組織「グローバル・グリーンズ」（2001年発足）にも加盟しています。

【緑の党 結成宣言】

3.11 後の 今 ここに
新たな道を歩み出す

森を奪う都市文明から
森に寄り添う文明 数多(あまた)へ
答えを生きる 時がきた

果てない世界市場化と
経済成長呪縛から
世界各地が共に奏でる
色どる経済成熟へ
答えを生きる 時がきた

いのち汚す原発と
奪い合いの地下資源より
太陽による 永遠の平和へ
答えを生きる 時がきた

はやさ 大きさ 効率主義 から
スロー スモール シンプル で
適正規模と多様性へ
答えを生きる 時がきた

過剰なほどに カネ追わず
過剰なほどに モノ造らず
過剰なほどに 働かず
仕事と時間を 分かち合い
豊かなところを 蘇らせる
答えを生きる 時がきた

買うしか術ない暮らしより
手足知恵で 創るを楽しみ
与え 支え いのちを謳歌し

自立しあう 安心へ
地域でつながる 循環へ
答えを生きる 時がきた

色んな人と 色んな生き方
互いに凸凹△ 認め合い
組み合わせさせて 補い合い
使命を宿し おのおの輝く
答えを生きる 時がきた

テレビの向こうに 決断任せず
自ら責任 引き寄せて
足元からの 微力をつらね
笑顔の未来 えらびとる
答えを生きる 時がきた

今日から土に 種を蒔き
こころに緑を 育てよう
いのちにぎわう 豊かな地球を
いのちみんなで 分かち楽しみ
100年先を 見渡して
答えを生きる 一步をここに
歩み出したい 一步をここに

「緑の党」を 立ち上げる

2012年7月28日緑の党結成総会

翌7月29日には、緑の党結成を記念してキックオフ・イベントが開催されました。会場の東京・星陵会館には約400人が参加し、二階席まで満席でした。

前日の「緑の党」結成総会の報告の後、ベアベル・ヘーンさん（ドイツ緑の党、連邦議会議員 会派副代表）、スコット・ラDRAMさん（オーストラリア緑の党、連邦議会上院議員）、シナン・マ ヴィヴォさん（台湾緑の党ら海外緑の党からの来賓あいさつに続き、国内からは、中沢新一さん（グリーンアクティブ代表）、鎌仲ひとみさん（映像作家）、吉岡達也さん（ピースボート共同代表） 上原公子さん（元国立市長）らの来賓スピーチがあり、また特別ゲストとして、俳優の山本太郎さんもスピーチしてくれました。

加藤登紀子さん（歌手）、いしだ壱成さん（俳優）、辻信一さん（環境運動家）、アイリーン・美緒子・スミスさん（グリーン・アクション）、雨宮処凛さん（作家）らから寄せられた多彩なビデオメッセージが紹介され、さらに、心にしみる Yae さんの歌や、ユースチームのパフォーマンスなどもあり、にぎやかで力強く活気に満ちた会となりました。また、福島からのアピールとして、武藤類子さん（福島原発告訴団長）もビデオ出演で参加しました。



明野処分場事故原因究明の現状について

明野廃棄物最終処分場問題対策協議会

代表 篠原 出

1. 事故の遮水シート異常検知について（その経緯について）

一昨年10月2日に遮水シート漏水検知システムが異常を検知し、昨年の夏ごろにかけて環境整備事業団と処分場設置業者が原因究明をし、その結果が安全管理委員会に報告された。しかし、事業団の報告では、原因究明がなされていないことを山梨大学工学部の坂野助教によって指摘され、それについての意見書が提出されました。

2. 坂野助教の意見書の取り上げを遅らせたのは、大きな問題である。坂野助教が第1回目の意見書を昨年10月7日の安全管理委員会に提出されました。その後もすぐに坂野意見書に基づき、原因が究明されていないので再調査するように私たち、対策協は、県と事業団に対して昨年の12月、今年の1月初めにかけて抗議と質問を処分場の入り口で展開してまいりました。事故原因をしっかりとつかみ改善していかなければ安全性が担保されず、住民は、安心して生活ができません。第二の水俣病が将来起きては困ります。

県・事業団は、今年の1月16日に我々対策協のメンバー11名を搬入妨害禁止の仮処分を甲府地裁に起こしました。なぜ、我々住民が安全安心に暮らせるように事故原因の究明をしてくれるようお願いしているにもかかわらず、甲府地裁は、間違っただけの仮処分の決定をしたのでしょうか。まったく理解できません。住民運動つぶし、対策協つぶしではないのでしょうか。他には考えられません。

法の番人としての肝心なことは、触れずに結論を出すというお役人根性丸出しの結論といわざるをえないものでした。相変わらずの裁判でした。

3. 坂野助教の意見書に基づき事故再調査を安全管理委員会で諮る

今年、3月23日、今年度初めての安全管理委員会が開かれ、地元浅尾区の篠原眞清委員の提案で坂野助教が参考人としての意見を述べる事が出来て、電気の専門家である山梨大学名誉教授・鈴木嘉彦氏と広島大学材料工学の専門家である澤俊行特任教授のお二人を推薦され、後日には、安全管理委員会に専門委員としてお迎えすることができました。

おかげさまで原因究明へと一歩進んでおります。今年の7月25日、鈴木名誉教授が事故究明の実証実験を山梨工業センターで安全管理委員会立ち合いの下、報道関係者公開の中で行われました。

県・事業団が当初発表した事故原因については、鈴木名誉教授によって今回の実験で否定されました。鈴木先生の事故原因の仮説に基づき、実証実験が行われましたが、また失敗に終わってしまいました。これから見ても明野処分場漏水検知システム異常は、いまだ、原因がつかめない状況にあります。

ただ、鈴木先生は、遮水シートが劣化（変形・変質）しており、そのために水が通ってしまうようである、と述べている。処分場は水に道に当たるところから、このようなことで原因は、いまのところ解明されていない。

明野処分場は、全国どこの処分場にも見られない滞水があり、これらが事故の原因になっているのではないかと思われる。

明野処分場は、水源安全のために早急に搬入を停止し、全量撤去を考えるべきである。

グリーンレター ⑪

芦川移住

野田公子

私は、この芦川に住んで3年になります。最初は、中芦川のカブト作りの古民家に2年、今は、上芦川の築60年の家を借りて住んでいます。私は、元々滋賀の山奥の築170年のワラ葺き屋根の家に住んでいた生粋の田舎人です。田畑を生業とし、結の残った美しい里山で、9人の大家族の一員として育ちました。忙しい両親に代わって育ててくれたのは、明治生まれの厳しい祖母でした。18歳で都会に出て結婚し、仕事の関係で8府県を転々とする生活を余儀なくされた私ですが、どの県に住んでも大した変わりばえがなかったというのが私の率直な感想です。住んでいたところが街であったというのが理由でしょうか。

そんな私が、この芦川に移り住んですぐにこの地で生きていこうと思いつめたのは、幼少に住んでいた田舎の美しい風景と日本人が忘れかけている精神性みたいなものが、この芦川にはまだ残っているということです。日々、平凡な何気ない生活をしている中で都会生活では満たされなかった充足感が、ここにはあります。幼い日々心に焼きついてきた日本の古き良き原風景が幾度となく暮らしの中で蘇ってくるからです。私はこの芦川を守りたいという願望があっても正面から取り組む心も体も持ち合わせていません。でも、ここで暮らし続けていくことはできます。村人の一員として。

10年20年と時が過ぎた時の芦川のことを考えると不安は残ります。しかし、今のままでは、この風景を守ることは困難であると思っています。築170年の実家を修理したとき、藁屋根を含めて、新築の家が一軒建った位の修理費がかかったということです。この村を離れ都会で家を建てて住んでいる後継者の皆さんが、古民家を修理し山や田畑を守るということは困難です。私たちも、自分たちが家を修理させていただきますという条件のもとでお借りしています。芦川のかぶと作りの家々は結の精神で村の人々が助け合って建てた家がほとんどです。そこには、村の人々の魂が宿っています。石垣に囲まれた田畑にも先人たちの並々ならぬ苦勞があつてこそその美しい風景です。その魂を受け継いだ村の人の誇りは、自身と笑顔にあふれています。そんな家や畑を簡単に借りることはできません。私たちみたいに運よく借りることができた者は、せめて借りた家や畑を祖先の誇りを傷つけることなく大切に使用して頂くことではないでしょうか。そして芦川の一員として少しでも多くの知恵を学び次世代につなげていく。それが、ここに住まわせて頂く者の役目だと思っています。平平凡凡に、村の人と語り笑い共に生きていくことが、いつか芦川の小さな発展に寄与できれば幸いであると、今は思っています。

東京・代々木公園で” さよなら原発～10万人集会”

あの大事故から数えて1年と4か月、7月16日、東京の代々木公園に10万人を超える人々が集まり、原発廃止を求める集会が開かれた。主催者発表は17万人、強い日差しの中、全国から抗議する人たちが集まり、みどり・山梨もその中に加わった。

昨年9月の明治公園の時は主催者発表6万人、主催者発表を比較すると今回はざっと3倍である。労組の動員の他に、ネットで情報を知り、あるいは仲間を誘いあい、駆け付けた人たちの参加が予想以上に多かったという。毎週金曜日の首相官邸前抗議行動の影響もかなりあるように思う。原発推進に危機感を抱き、怒りを持ち始めているのだ。



それにしても、とにかく暑かった。はっきり言って、あの炎天下での集会は苦行そのもの？高齢者の方も多くいたのに。しかし、全国から17万人の人が「原発いらない」の一心で駆け付けたのだ。これはすごいことである。どこへ行っても人のうねりと旗の林立。そして、みどり・山梨はおじさんおばさん中心だが、会場では若い人や家族連れもかなり参加していた。これは3.11以前のデモや集会には見られなかった光景で、なにか社会の底で静かな、しかし、大きな変化が始まっているのかもしれない。

一応、集会のメインはサッカー場につくられた第一ステージ。呼びかけ人である内橋克人さん、大江健三郎さん、落合恵子さん、鎌田慧さん、坂本龍一さん、澤地久枝さん、瀬戸内寂聴さん、さらに賛同者である広瀬隆さん、福井から中蔦哲演さん、福島から武藤類子さん、アートの奈良美智さんらが原発廃止への思いとアクションについて発言、会場から拍手と歓声が沸き起こる。そして、一応といたのは、このメインステージの他にも3つのステージが設けられていたからで、同時並行でさまざまなトークやライブがおこなわれていた。さらに、公園内の広場のあちこちで露店、パフォーマンスもあり、どこへいっても参加者で溢れていた。まるで「祭り」のなかにいるようだった。今回の集会は、メインステージはあるものの、あえて中心を意識しない、参加団体、個人の自由な活動に委ねられたようだ。

集会終了後、原宿、渋谷、新宿の3コースに分かれデモが行われた。相変わらずデモの列は分断されていたが、集会に参加した人の多くが加わり、路上に出て、旗やプラカードを手に、「原発いらない

い」、「再稼働反対」、「福島を返せ」、「未来を返せ」とシュプレヒコールを繰り返した。

原発反対の運動には多くの人たちがかかわってきている。60~70年代で原発に反対していたのは主に農業・漁業に従事する人たちで、地域の住民の生活を守る戦いであった。チェルノブイリ以降は、都市の中産階級がこの運動に加わる。その先頭に立っていたのが環境保護団体、労働組合、消費者運動、家庭のお母さんたちである。そして、3.11以後は新しい若い人たちの抗議が加わっている。その背景には、新自由主義やグローバリズムによる今日的な貧困、格差、差別がきつとあるはずだ。

今回の大集会では、変わらず労組系の旗が目立ち、確かに動員による参加も多かったようである。しかし、注目したいことは、何の組織にも属さない多数の個人が仲間を誘い合い、集会・デモに加わり始めたことである。この変化は一過性なのか、7.16あたりがひとまずの頂点なのか、それとも、今後、政治を動かす力になっていくのだろうか。

他方、運動は大きくなればなるほど「分断」の力が加わる。外部との関係、たとえば体制の仕掛けやキャンペーン、そして内部の相互の関係のなかで。福島は武藤さんは「分断のワナに落ち込むことなく、賢くつながっていきましょう」と呼びかけ、発言を締めくくっていたが、このことばがとても印象的だった。そして、運動のこれからを考えつつ、今、福島では何が起きているのか、このことにも深く目を向けたいと思う。次回の集会は秋に行うとのこと。（赤荻記）

夏休み保養キャンプ

福島県内の小2から中1の子どもたち16名を、7月30日から5日間、ここ山梨に招いてもてなしました。「いのち・むすびば」が中心となって多くのボランティアスタッフが協力した5日間でした。愛宕山少年自然の家で宿泊し、フルーツ公園や本栖湖を訪ね、キャンプファイヤーやバーベキュー、水遊び、みんなで輪になってのつどい、・・・子どもたちの笑顔がうれしかったです。

福島では、外遊びや水遊び、大きく呼吸することさえもままならず、そのことを思うと、この5日間はあまりにも気休め的で心が痛みますが、最終日の3日は元気いっぱい子どもたちをスタッフ一同、涙で見送りました。ご協力して下さった皆さまには深く感謝いたします。（武藤・赤荻記）

甲府でも再稼働反対

山梨でも多くの団体が東北に向けて手を差し伸べています。そして、「原発の再稼働を阻止する」べく首相官邸前の抗議集会に呼応して「甲府でもやるじゃん」ネットを立ち上げました。

毎週金曜日の午後6:00甲府・信玄公前から1キロほどのデモ行進に参加することで、原発の恐ろしさを政府に再確認させ、次世代の子どもたちに惨禍を残さないために、一人でも多くの皆さん、共に声を上げていきましょう。（武藤・赤荻記）

とことん市民・野沢今朝幸の笛吹市議会レポート

主な議会活動

H24年3月定例議会<2月24日~3月16日>

◎一般質問

笛吹市から120キロ先に位置する浜岡原発は、3.11の福島第一原発と同じであり、構造的に最も危険な原発とされている。さらに、浜岡原発は近い将来発生するとされている東南海・南海地震の震源域に位置しており、この点からも極めて危険な原発である。だから、福島第一原発の「原発震災」は決して「対岸の火事」ではないわけである。

だが、荻野市長は、3.11から1年も経つのに、浜岡原発の危険性に対し、公の場で何の発言も活動もしていない。そこで、今回の一般質問は、「フクシマ原発震災に何を学び、市としてとるべき行動は何か」と題して、以下、5つの質問を行った。

- (1) まず、市長は、東北地方太平洋沖地震による福島第一原発の事故＝「原発震災」に対し、どのような認識をもっておられるか。
- (2) 笛吹市にとって、もっとも危険な「原発震災」は、浜岡原発が東海・東南海・南海地域に襲われた時発生すると考えられるが、市長は、その「浜岡原発震災」を未然に防ぐあるいは減災する何らかの行動をとるつもりはあるか。
- (3) 浜岡原発が「原発震災」という最悪の事態になった時、どのようにして市民を放射能汚染から守るか、すぐに調査研究し、行動計画をつくる必要があると思うがどうか。
- (4) 市では、今回、震災被害者をいち早く受け入れたが、その実績・経費も含め、どのように評価しているか。
- (5) 今回の震災被害者の受け入れを生かして、原発周辺・臨江市町村と「被災時避難支援協定」を積極的に結ぶべきだと考えるがどうか。

市民の何人からか、かなり確かな話として「荻野市長は脱原発に積極的だ」と聞いていたので、私は少なからず期待し、今回の質問に臨んだ。

だが、まず、このような、荻野市長にとってその政治姿勢が問われる質問に対しても、いつものことであるが、市長本人が自らその見識見解を述べることなく、担当部長に答弁させるという形をとった。このことからして、荻野市長は、市民の生命と財産を「原発震災」から守るという、気概も使命感もまことに希薄であるとみていいと思う。しかも、その部長の答弁は、「現在、国・県で原子力災害の防災対策の見直しを行っており、その指針を受けて、市の対策を進めていきたい」という、全く緊張感のないものである。

国や県いわゆる「お上」が信じられない、ということが今回の「原発震災」から学んだ教訓であったはずである。笛吹市民の多くが望んでいるのは、市長が国や県を批判し、自ら「脱原発」の方向を示すことであろう。現に「浜岡原発の廃炉」を求める請願が、市民から提出されているのをみても分かる。

荻野市長は、日頃から「市民の生命と財産を守る」のが、政治の第一の仕事であると言っている。仮に、荻野市長が浜岡原発の危険性を十分認識しているとしたら、「市民の生命と財産を守る」とい

う市長の言葉は、聞えのいい美辞麗句以外の何ものでもないし、もし仮に浜岡原発の危険性の認識がそもそもないとしたら、市長をやるような資質に欠けていると言わざるをえない。

H24年6月定例議会<6月18日~6月28日>

◎一般質問

一般質問の持ち時間は（答弁の時間は除き質問のみの時間）は各自15分と短いので、質問は2問までとなっているが、私はこれまで質問する場合、一問だけにし、出来るだけ突っ込んだ質問となるよう心がけてきた。

しかし、今回は時宜を逸しては質問の緊迫感が薄れるような事案が2件あったので、敢えて二つの質問をした。一つは「指定管理委託施設の改修」に関する質問であり、もう一つは「保健師の支所への配属」に関する質問である。

一つ目の「指定管理委託施設の改修」に関する質問のポイントは、「沢妻亭」という公設の食堂に対する指定管理委託業務を公募した時点では、「施設の改修」の条件は何ら公にされていなかったにもかかわらず、業者が決まった後、速やかに大規模改修がなされたという点にあり、しかも壊れたところを直すとかというやむを得ない改修ではなく、そのほとんどが模様替えの改修であった点である。さらにその大規模な改修が、委託が決まった業者によって成されたという点である。

今回の改修は、これまでの指定管理施設の改修の枠から大きくはずれるものであり、全く原理原則も基準もないところで実施されている。サービスを提供する笛吹市のほとんどの公共施設は、市長の方針で指定管理制度に変わりつつある現状を考えると、今回の「沢妻亭」の改修は、今後に大きな波紋を引き起こすことが想定される。

だから、私は、今回の改修を踏まえて、指定管理施設の改修に関する原理原則をしっかりと決めるべきだと、質問の中で提案した。しかし市当局はそれを受け入れようとしない。受け入れると、今回の「沢妻亭」の改修が、問題のあったことを認めることになるからであろう。ここでも、私が常々指摘している「行政文化としての無謬性の病」が露見するわけだが、間違いを素直に認めるところからしか、物事は改善されないことを考えると、この病は市民にとって致命的である。

二つ目の「保健師の支所への配属」に関する質問は、芦川町で昨年度発生したいずれも病気を原因とする二人の高齢者の「孤独死」に関わるものである。

医療機関から遠く離れ、交通の便も悪く、独居高齢者の多い芦川町にあって、相次ぐ高齢者の「孤独死」は、多くの町民が抱いていた不安を現実のものにしてしまった。そこで、今回の一般質問で次のように当局に問い正した。

- ①市当局は、今回芦川で発生した「孤独死」をどのようにみているか。
- ②市としての対策は何か考えているか。
- ③芦川町民の不安の解消を今後の予防という観点からすると、保健師の芦川支所への配属が必要と考えるがどうか。

この質問では、③の提案への答弁がどのようなものとなるかがポイントとなるが、市当局の答弁は、「保健師の焼酎がなくても、高齢者の不安解消や安全・安心の開く歩ができるように配慮する」というものであった。

荻野市政は、合併以来、経営の効率化・合理化と称して、支所機能を縮小し、本庁へ機能を集中し、

いわば「中央集権的な体制」を築きあげてきている。保険分野においてもこの方針が一律に適用され、保健師は6つある支所からすべて引き揚げさせ、本所所属となっている。

もちろん、市町村合併後、行政分野においては、仕事の効率化という観点から、つまり経費削減という観点から、本所へ集中することも必要である。しかし行政における対人サービスのようなもので、闇雲に本所へ集中すると、行政サービス上必ず弊害が生まれる。

合併前の芦川村においては、保健婦さん—こう呼んだ方がしっくりくるわけだが—は、村民とりわけ高齢者にとって、安心な日常を送るためになくはならないものであった。気心が知れた保健婦さんが巡回してきてくれる。そして気軽にお茶を共にしながら、健康や病気について相談にのってくれる。必要から、お医者さんの診断の段取りもつけてくれる。そういう日常が合併前の芦川村にはあった。

保健婦さんが身近にいてくれることによって得られた「心の安寧」は、市当局の言うように他の方法で簡単に埋め合わせるようなものではない。荻野市長は、多機能アリーナ建設によって市民は健康になり、日本一安い保険料になると夢のようなことを言っているが、市民が必要とするのは多機能アリーナなどではなく、身近にいる保健師である。

「ストップリニア 沿線住民の集い」のお知らせ

リニア中央新幹線計画が、形ばかりのアセスを行いながら、どんどんと進行中です。山梨県も知事をはじめとして、経済効果に目の色を変えて、異常に高い数値をはじめ、「とらぬ狸の皮算用」を公表中です。

そんな中、リニア計画の真の部分の冷静に検証し、疑問を抱く市民も僅かずつですが増え始めています。これまでリニアを考える市民の会は、山梨県や長野県が中心でしたが、最近神奈川でも会が結成され、県内各地で集いが催されています。

ご存知のように、リニアがもたらす影響は地域に共通のもの、地域によって異なるものがあります。山梨県でも、実験線延伸工事の笛吹市と、駅が設置される予定に甲府市、また長大なトンネルの出入り口近くの南アルプス市など、地域それぞれの特有の事情があります。そこでそれらの問題について、東京～神奈川～山梨～長野～岐阜各都県の市民が甲府市に集まり、各地の現状や問題点の報告を行ったうえで、今後、手を結びながらリニア計画にどう対処していくのかいっしょに語り合うことになりました。9月30日（日）13時30分より、ぴゅあ総合で行います。

他県からたくさんの方が集まります。山梨県からもそれに負けないよう、多くのお知り合いに声をかけ、ご参加ください。お願いいたします。（川村記）

編集後記 今回も発刊が遅れてしまったことをお詫びします。緑の党、明野処分場問題、反原発、リニアなどさまざまな現場からのレポート、お知らせを掲載しました。ご協力に感謝します。◆話題の新刊「戦後史の正体」(孫崎亨)を読む。日米関係で今まで推論されていたことが詳細な事実で語られている。石橋湛山の立ち位置もしっかり分析されていて、おもしろい本です。◆緑の党が結成された。自然、自然エネルギー、脱原発にはさまざまな考え方、立場があり、緑の党も一枚岩ではないだろう。にもかかわらず、立ち上げの意義は大きい。新しい党の活躍に期待したいところです。乾杯。(M・A)